

---

# 真・恋姫＋無双 流れ着いた世界の中で

田中 田中

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 流れ着いた世界の中で

### 【Nコード】

N4594N

### 【作者名】

田中 田中

### 【あらすじ】

元々モバで書こうと思っていたんですがこっちにしました。

前奏。  
？

深い森の中、黒尽くめの男が一人立っていた。

その男は裾が膝裏ほどまである外套を纏っていた。

男の顔は、男が外套についているフードを深く被っているため口元しか窺えない。

男の周りには人間の死体が転がっており、なかには切り殺されたものや獣か何かに引き裂かれたような死体もあった。

裕に百人は超えているだろう死体から未だとめどなく血が流れ出ているため、辺りはまさに血の海となっていた。

男は先程からその場に立ち尽くしたまま何か思案していた。

またもや、か。僕にやめることはできるか？

わからない。これで何回目だ？

とうに百は越えているだろうな。わかっていた。

こつなるくらい…

僕は変わらない。否、変わらないのか…

わからない。本当に僕がわからない…

恐ろしいか？自分が、他者が、この時が…

恐ろしい？そんなことはないさ。ただ面倒なだけだ。

早く時が流れてくれはしないか。面倒だ。

男は消えた。その場から男は突然消え去った。

後にその場所には何もなかったかのように風が吹いた。

時は流れ十数年後。

十数年前、外套を纏った男が百ほどの人間を殺した場所に、時は流れ成長した筈なのに変わらぬ背中があった。

男は座り込み、木にもたれていた。

その周りには犬や猫、鳥に熊に猪、果ては蛇やら熊猫やら何やらた

くさんの動物がいた。

動物達は一丸に心配そうな顔をしていた。

ああ、もう僕は終わりか…我ながら呆気ないものだな…

やはり身体は人だったか…いくら精神が人を逸脱していたとしても、人の身体が化学的な毒に勝てる筈ないか…

男は苦笑する。

自然のものには勝てるのにな。皮肉なもんだ。

しかし、この場所には縁があるな。

捨てられたのも此処。育ったのも此処。死ぬのも此処か…

男は右手で近くにいる猫の顎を撫でる。

まあ、いいだろう…

もう時間か…呆気な…かった…な…

男はそれから動くことはなかった。

男を囲んでいた動物達は骸に寄り添い、男と共に眠りについた。

前奏。  
？

……うう、此処は？

周りを見ると何もなただ真っ白な部屋。

純白と言っていいほどの白で彩られている部屋に、男は自分は場違いかもしれない、と思った。

「おお、起きたか。」

何処から声が聞こえた。その声音から恐らく声の主は女性だろう。

「誰だ？何処に居る。」

姿の见えない相手に警戒しつつも辺りを見回す男。

「じじじやよ。」

男は後ろを振り返ると少し驚いたように声の主を見た。



声の主は妙齡の女性で、真っ白な服に身を包み、夜空のように蒼い髪を頭の後ろの高いところで束ね、翡翠色の双眸の持ち主だった。

誰だ？そもそも僕は死んだ筈なのに…

「僕は神じゃよ。それと、おぬしは確かに死んだ。」

「神か…人の思考の中まで入って来るな。」

神という単語に多少なりとも驚きはしたが、全く顔色を変えることなくそう返す男。

心を読まれたことに関しては慣れているようすらに見える。

「それで？」

「ふん、食えんやつじゃの。」

「まあいい。おぬしは毒で死んだ。これは確かじゃ。しかしな、おぬしの死は本来違う死に方だったんじゃないが…」

「僕の世界の人間じゃない何者かに毒を盛られ、殺された。そして、罪滅ぼしとして僕の存在を違う世界に送り込み、あわよくば危険因子を排除させようとした、と。」

神の言おうとしたことをズバリと当てた男。

神は顔色を変えることはなかったが、内心動揺していた。

「…何故わかった？」

「かまをかけただけ。後は眼が語っていた。」

なるほど、と理解した神。生前の彼を観察していたことがあるため、彼がそういうことができることを思い出した。

「なれば話は早い。その通りにしてくれんかの？」

「………了解した。」

「乗ってくれるか。正直助かる。」

「これは僕のためだ。ほかの誰のためじゃない。」

男はそう言つとその場に座り込んだ。

「僕の身体は使い物にならんだろう。転生するなら早くしてくれ。」

両手をやれやれ、といった調子で広げる男。

「全く、食えんやつじゃ。」

神は微笑しながら言った。

「転生するにあたって、いくつか言わなければならんことがある。」

「具体的には？」

「おぬしの行く世界のことじゃ。三国志は知っているな？」

「まあ、一応は。…僕が行く世界が三国の世界だって言いたいの？」

「あながちはずれではない。しかしな、おぬしが行くのは似て非なる外史というもの。この世界は仲間になる将は大体同じと聞いている。」

しかしな、と続ける神。

「有名どころの将はあらかたおるが、いない将もある。しかし、その世界の中には存在しておるそうじゃ。」

「また、あらゆる時系列が歪んでおり、何が起こるか分からん。儂ら神でさえもな。」

「不確定、且つ予測不可か。」

「そんな感じじゃな。後はおぬしの能力のことじゃ。」

「能力か…どうなるんだ？」

自分の手を少しの間見つめた後そう聞き返す。

「そうじゃな…生前の能力を引き継ぎ、更に強化。読み書きなどが

できるようにする。様々な抵抗の底上げくらいか。」

「毒やら何やらが効かないのか。」

「そうじゃ。しかし、致死毒に関しては2、3日寝込むかもしれんな。」

「となると多少は効くのか。」

「まあな。ついでに言っておくが、ほかのものは始めはないぞ。」

「何故？」

「赤子の時から読み書きや戦闘ができるのはあまりにも異端過ぎるから、三つを過ぎた辺りから徐々に解放するつもりじゃ。」

「それはありがたい。」

「気にするでない。もとは僕の失態じゃ。礼を言われる筋合いはないわ。」

「そうか、と返す男。」

「さて…準備はいいかの？」

「準備も何もないだろ。荷物すら無いんだから。」

それもそうじゃな、と返す神。

「それでは、いくぞ。」

「承知。」

神の唇が言の葉を紡ぐ。

刹那、男の足元に蒼い炎が揺らめき始める。

辺りが光に包まれる。

徐々に足のあたりから男の身体が光の粒子となって消えていく。  
男は静かに目を閉じ、顔の前で手を合わせ、そのまま一礼した。

「行つて来る。母様。」

口元に笑みを浮かべつつ、どこか悲しそうに言った。

「気づいておったか。」

そして、男の身体が完全に消えようとしたとき、神は涙を流しながらも笑い、彼に言った。

「行つて来い。馬鹿息子。」

「必ず帰ってこい。」

光が消える。

男はいなくなっていた。

ありがとう、馬鹿息子。

その場に残っているのは涙を流しながらうずくまる神と、彼女の囁き泣く声だった。





前奏。  
？

「まだか…」

村の一角に佇む一軒の家の中で一人の若い男が右往左往している。

「むう…まだか、まだか。」

せわしなく動き続ける男に吉報が訪れた。

「旦那様っ！」

男のいる部屋に一人の少女が入って来た。

「生まれたかつ！」

男は喜々として少女に問う。

「はい！早く奥様のもとへ！」

それを聞くより早く彼の妻のいる部屋へ向かった。

ガチャッ！

「華音！」

突然、部屋に入ってきた男に少し驚きはしたものの、すぐに笑みを浮かべ男を手招く。

「はあはあ、驍さん…生まれたわ。」

息も絶え絶えに男　驍に告げる妙齡の女性。

女性の名は華音というらしい。

「ああ…よく頑張ってくれた…ありがとう。」

そう言って驍は彼の妻　華音を抱きしめる。

「どういたしまして。」

微笑みながら言う華音。そして、視線を侍女の方へ向ける。

「私達の子供よ」

その侍女は先程、驍を呼びに言った者だった。

「朔。」

「はい、奥様。」

朔は何かを腕に抱え、驍の前に行く。

「旦那様、元気な男の子ですよ。」

そう言つて驍に生まれたばかりの赤子を手渡す。

「おお…」

「お前が私の…いや、私達の息子か。」

驍は赤子に笑いかける。

「あつあつ。」

赤子は驍に手を伸ばし笑っていた。

「ねえ、驍さん。」

寝台に横たわりながら、顔を驍の方に向け呼びかける。

「この子の真名、考えた？」

この問い掛けに対し男はうつろたえるばかりだった。

「…すまん。」

頭を垂れる驍。

「そんなことだろうと思ったわ。」

驍は華音に呆れられ更に落ち込んだ。

「旦那様の名付ける才能は皆無ですからね。」

朔のこの一言にどめを刺され驍は部屋の隅にうずくまった。

「仕方ないわね。あなた、ふざけるのはそろそろ終わりよ。」

そう言われると驍は立ち上がり華音に赤子を手渡した。

華音は寝台から身体を起こし、赤子を抱いた。

それを見ると驍は寝台の側にある椅子に腰掛けた。

「すまん、華音、朔。」

それを言い終わり、朔が目で二人に、よろしいですか、と語りかけると三人は真剣な面持ちになった。

「では奥様、この子の名を。」

「姓は丁、名は奉。」

「字は承淵、真名は霧蒔。」

「奉に承淵、霧蒔か…いい名だ。」

三人は微笑み視線を赤子　霧蒔に向ける。

「すうすう。」

そこには眠りに落ちた小さな身体があった。

「ふふつ。可愛いわ…」

優しく息子を撫でる華音。

「ああ、可愛いな…」

「本当に可愛いらしいですね。」

母の腕の中で眠る霧蒔の顔はとても安らかだった。



前奏。 ? (前書き)

5年後です

主人公視点

設定云々です



前奏。  
？

僕が生まれてからはや五年、色んなことがあった。

まずは僕の名前、姓を丁、名を奉、真名を霧蒔という。

丁奉は字を承淵というんだが、字は元服のときに授かるらしい。

補足すると、真名というのはその者を表す神聖な名で、許可無く呼ぶと殺されても仕方ないといわれるくらい大切なものらしい。

丁奉は三国志の呉の将で、史実だと孫権の時代の呉の当初では最強クラスの将だった人だ。

また、彼はつぶての投擲技術は凄まじいものだったそう。

二つ目は身体能力。

これは三歳のときに気づいたけど、生前に少し劣る程度だった。三歳ということは、今までを含めて考えると、あと一年もかからない

で生前を超えらると思う。

母様（神）は三歳からって言ったけど読み書きだけらしい。

ちなみに三歳から鍛練をするようになった。

父さんや母さんはすごい驚いてたようだった。

三つ目は僕の周り。

父さんはこの村の村長、母さんは孫堅様に仕えていて、いまは僕らを育てるためにこの村に戻って来てる。

僕ら、というのも半年程度前に妹が生まれたからだ。

妹の名は丁封、真名は魅薄。

丁封は史実だと丁奉の弟である。

また、村というよりは町といったほうが形容が正しいため、人や

物資が多いこの町は、何度か賊に襲撃されている。

だが、母さんを始めとした父さんの私兵に、たちまち賊は討伐、鎮圧、撃退されていた。

それで十年ほど前、賊との戦いで戦死した兵の娘を家で引き取り、侍女として今も丁家に仕えている姉貴分がいる。

彼女の名は陳武、字は子烈、真名は朔という。

陳武　朔姉さんは僕より十つ上で武に長けた人である。

史実の陳武は呉の精鋭を率いていて、その隊は負け知らずの隊だったそうだ。

朔姉さんと僕は元服したら孫堅様に仕えることになっている。

といっても朔姉さんはあと数年で孫堅様に仕え始めるらしい。

朔姉さんは既に元服していて、丁封が五つになるまでという約束で家に残っている。

あと、僕はこれから幼なじみと一緒に孫堅様のもとに三年ほど預けられる。

幼なじみの名は徐盛、真名を久遠という。

史実では曹操が攻めてきたときにいくつかの隊ともに孤立し、絶望にうちひしがれていた最中、敵軍に突撃し味方に勇気を与え、その状況を打破した勇将であった。

なんでも、孫堅様の娘の孫策様を筆頭としたお嬢様方に、同世代で異性の友達を作らせたり、男とともに過ごさせ男に慣れさせたりしようとしているらしい。

他にも家では書物がなく出来ない勉強や、実際の兵役を体験させるためだという。

そのため今は孫堅様が来るのを待っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4594n/>

---

真・恋姫†無双 流れ着いた世界の中で

2011年10月7日16時11分発行